

# ヤスパーズ『世界観の心理学』における「交わり」\*

## Der Begriff der Kommunikation in Jaspers' *Psychologie der Weltanschauungen*

布施圭司\*\*  
Keiji FUSE

### 概 要

ヤスパーズにおいて「交わり」(Kommunikation コミュニケーション)は主要な思想の一つであり、実存は他の実存との交わり、すなわち「実存的交わり」においてのみあることが強調されている。交わり思想が明確に打ち出されるのは、ヤスパーズの哲学が確立された『哲学』(Philosophie 1932)においてである。『世界観の心理学』(Psychologie der Weltanschauungen 1919)は、ヤスパーズの心理学から哲学への移行期に執筆され、いまだ哲学的な独自性が十分には現れていない。しかし、交わり思想の萌芽となる考え方は提出されている。本稿では『世界観の心理学』における「間接伝達」と「了解」を後年の交わりの思想につながる要素として考察する。実存は対象として把握されず、対象化されるものを素材としつつ、それらを動かす力として理解される。そのような実存の伝達が「間接伝達」である。また「了解」の規定の一つとして「愛ある闘争」が挙げられている。愛ある闘争は、無限なものへの関係においてお互いに仮借なく吟味し合い自己に達するというもので、後年の交わりの規定に通じる。『哲学』においては、実存は精神と区別され、明確に「自由」として規定され、主客を越えた超越者が自由の根拠として主張される。このことにより、交わりは自由の実現の場であり、同時に超越者の顕現の場として、ヤスパーズの思想での位置が確立したと考えられる。

#### 1 はじめに

ヤスパーズは、代替不可能な個人すなわち「実存」が自己の存在の極限である「限界状況」に直面し、超越者の探求に向かうありようを考究した。実存は自由として捉えられており、その意味で人間の自由の諸相、すなわち世界・他者・超越的なものとの関わりにおける自由のありようを考察することが、ヤスパーズの哲学の内容と言える。その哲学において「交わり」(Kommunikation コミュニケーション)は主要な概念の一つである。交わり思想が明確に打ち出されるのは、ヤスパーズの哲学が確立された1932年の『哲学』(Philosophie)において

であり、実存は他の実存との交わり、すなわち「実存的交わり」においてのみ存することが、繰り返し強調されている。またその他の人間のさまざまな対他関係が考察され、実存的交わりの特徴が叙述されている。実存的交わりにおいて、実存の自由は現象し、超越者が顕現する。『哲学』以前に眼を向けると、1919年の『世界観の心理学』(Psychologie der Weltanschauungen)には、「交わり」という言葉はあるものの、後年のような明確に規定された概念ではなく、主題として論究されてもいない。哲学的な立場を確立した『哲学』に見られるような、人間のさまざまな交わりの検討や実存的交わりの特徴の考察は現われていない。『世界観の心理学』は、ヤスパーズの心理学から哲学への移行期に執筆され、いまだ哲学的な独自性が十分には現れていない。しかし、「実存」(Existenz)、「限界状況」(Grenzsituation)、「主観-客観の分裂」(Subjekt-Objekt-Spaltung)等の主要な概念の萌芽は提出されている。「交わり」に関連する概念としても、

\* 原稿受理 平成18年10月1日

\*\* 一般科目

「間接伝達」(indirekte Mitteilung) が実存の伝達として叙述されている。また『世界観の心理学』は、世界観の「了解」(Verstehen) を目指すものであるが、「了解」の規定の一つとして、後年の交わりの規定の一つである「愛ある闘争」(liebender Kampf) が与えられている。従って、交わりの思想は完成した形ではないが、萌芽として現われていると推測される。本稿では、交わりの思想の成立の所以を究明するために、『世界観の心理学』における、後年の交わりの思想につながる要素を取り出し、考察することを試みたい。

## 2 『世界観の心理学』の成立の事情

この節では、『世界観の心理学』の成立の事情およびヤスパース思想における位置について確認しよう。『世界観の心理学』以前に彼の発表した著作は、1913年の『精神病理学総論』(Allgemeine Psychopathologie) である。この書は、フッサールの現象学とディルタイの「了解」(Verstehen) の影響を受け、「了解心理学」により精神病理の全体を解明しようとしたものである。了解心理学は、精神病理を諸要素に分解し自然科学的に分析するのではなく、精神生活全体の構造連関において理解しようとするものである。そもそもヤスパースは医学を志した頃に、医師になった後は精神医学と心理学を専攻し、ゆくゆくは心理学者になりたかったようである。<sup>\*1</sup> その意向が「了解」という単に客観的・分析的ではない手法を用いたことに現れていると見ることもできる。

ヤスパースは1916年からハイデルベルク大学の心理学の教授となり、その講義の一部をまとめたものが1919年の『世界観の心理学』である。ハイデルベルク大学では医学部で欠員がなく、哲学部で心理学の員外教授であった。この立場が『世界観の心理学』の内容に反映している。この時期のヤスパースは、感覚心理学、記憶心理学、疲労心理学の他に、社会心理学、民族心理学、宗教心理学、道徳心理学などを講じたようであり、彼自身が『世界観の心理学』の第四版へのまえがきにおいて後から振り返っているところによると<sup>\*2</sup>、心理学の名の下に知られうるいっさいを研究し始め、気づかないうちに自らの哲学的歩みを開始していたという。これらの講義のうちヤスパースにとって最も重要だった内容が、『世界観の心理学』であったとヤスパースは述べている。「心理学」という名を与えられているが、実際には哲学的内容を主たる内容としている。心理学的な人間心理の分析も随所に見られるが、さまざまな世界観を叙述しつつ、人間精

神のあり様を解明し、自覚的な生を促すものであった。

ヤスパースは、『世界観の心理学』においては、哲学を世界観を与えるものと考えていた。「哲学は昔から、単に普遍的な考察より以上のものであったのであり、それは衝動を与え、価値表をかかげ、人間の生きることに意義と目的とを与え、人間が安らぎを覚える世界を彼に与えた、一言をもってすれば人間に世界観を与えたのであった」(Jaspers1919:S.2)。このような哲学を彼は「預言者の哲学」(prophetische Philosophie) と呼んだ。これに対して『世界観の心理学』は世界観を与えるものではなく、心理学的連関において世界観を普遍的に考察するものである。従ってそれは哲学ではなく、心理学である、と考えられていた。しかしながら、『世界観の心理学』は客観的・科学的な考察や類型化にとどまるものでない。

「了解」という手法は、ここでは大きな拡張を受け、叙述することによって他者の自由に訴えかけるものである。後年ヤスパースは、むしろ「預言者の哲学」は「宗教の代用品」であり、『世界観の心理学』は実際には哲学であったと述べている。<sup>\*3</sup>

『哲学的自伝』(Philosophische Autobiographie) によれば、ヤスパースは1920年頃、心理学的考察のスタイルを継続するか、本格的に哲学に取り組むか、「重大な岐路」に直面したという。<sup>\*4</sup> 周知のようにヤスパースはウェーバーから大きな影響を受けたが、ウェーバーは1920年に亡くなった。そのウェーバーを振り返る中でヤスパースは次のことに気づいたという。今日科学なしには正当な認識は成り立たず、科学は「哲学すること」

(philosophieren) の必須の要素であること、同時に科学とは異なる哲学的思惟を純粋な形で示すことが必要であること、の二つである。<sup>\*5</sup> 『世界観の心理学』は科学的な心理学と実存哲学のいわば混交ないし折衷であったと考えられ、1920年以降は哲学的思惟の純粋化・精密化が目指されるようになったと考えられよう。ヤスパースは『世界観の心理学』以降は、1922年と1923年に既に出来上がっていた原稿を出版した以外は、しばらく著作を発表せず、1932年の『哲学』で実存哲学者としての立場を確立することになる。

## 3 「間接伝達」

交わり思想につながる要素を『世界観の心理学』に探すと、「間接伝達」(indirekte Mitteilung) と「了解」(Verstehen) が挙げられる。それぞれについて考察しよう。まずこの節では、ヤスパースは「間接伝達」につ

いて考察しよう。

そもそも世界観は交わりにおいて生きて働くようになることとされている。「もろもろの世界観の力は、それらが教説として合理的な諸形式を獲得することによってはじめて、個人たちの間の交わりへ踏み込むことができる。個人ですら、交わりの形成がうまくゆかざり、自ら明哲となり、かくしていれば自己自身との交わりに入り、自覚的になるのである。それゆえ生ける者は同時に、明哲性と交わりとに突進するが、それは結局同じことなのである。彼はさしあたり、首尾一貫性をもった諸原理に基づく教説を欲するが、しかしその際、それら教説が、生成の過程では生の表現であっても、固定化され、形にはめるものとしては、結局一面的であり、生を奪い、機械化するように働く、という事実を経験する」

(Jaspers1919:S.375)。もちろんここでいわれる交わりは、後年の実存的交わりではなく、自己と他者の相互交渉といった一般的な意味である。しかし、交わりにおいて明晰性が得られ、個人は自己自身になるとされており、自己存在にとって交わりが重要な役割を持つことが表明されている。ある世界観は確立した教説として固定されると、精神の自由を奪い、生にとって導きとなることはなくなる。世界観が生きて働くためには、個人がある世界観と交渉しつつ、自己自身となるという過程が必要である。

自己自身の明確化ということは、直接伝達される対象的なものとして明確化するというのではない。生きて働いている現実の世界観は、直接的な客観の形では抽象化・形式化を受けるため、十全には把握されない。それゆえ世界観の伝達は「間接伝達」という形をとる。「いかなる教説も生ではなく、教説のいかなる伝達も生の譲渡ではない。間接的伝達、換言すればつまり、直接的なものを、そこではなお何らかの他者が働いている媒体として経験することが、ここではあたかも、生そのものが伝えたいとするかのような何ごとかなのである。たしかにソクラテスは、自分は生み出さず、手助けするだけだ、という。キルケゴールはしかし、間接伝達を、まさしく《実存伝達》と呼んでいる」(Jaspers1919:S.378)。現実の生は客観的な教説の形では捉えられない。生は客観的な教説を媒介にしつつ、その中に働いているものである。『世界観の心理学』において、「実存」は種々の態度・世界像を生きて働かせ世界観を構成する「精神の生」という規定を与えられている。それゆえ、生きた世界観の伝達は「実存伝達」と言えるのである。

「あらゆる教説、あらゆる合理的なものは、一般的なものである。それゆえそこには、決して本質的なもの・

絶対的なものはない。精神の実体・実存は、いつでも同時に、絶対的に個別的であるからである。それゆえ個人における精神はたしかに、明哲性と交わりを旨ざしてたえず働いてはいるが、しかし同時にいつでも、どこことなく隔絶的であり、どこことなく孤独である。彼にとっては、重大事において他者から助言される可能性もなく、彼が何らかの客観的一般的原理によって実存しうるような可能性もない。しかし間接的伝達は、重大事をすっかり解明することはできないが、そのものを人間から人間へと接続するところの、一本の糸なのである。人間は自己自身をもってしては、他者とともにするより以上に、交わりにおいて先へ達しない。間接的伝達において人間は、他者へと同じく、自らの実存において自己自身へと働きかけ、この働きを逆に蒙る。それゆえ明哲性への最大の衝動は同時に交わりへの衝動であり、しかもあらゆる明哲性は、間接的に現存し運動している、暗きものによって囲まれているのである」(Jaspers1919:S.378)。この引用では、まず実存が絶対的に個別的であるがゆえに、直接伝達されえないことが述べられている。客観的なものにおいては、実存にとって本質的なものは語られない。実存は、他の何ものによっても代替されえない「単独者」である。しかし、直接的に知られないとしても、間接的に知られる可能性は残っている。実存は、決して他から切り離された孤立した存在ではなく、他との交わりにある。他者との交渉において、同時に自己に働きかけ、他に代替されない自己のあり様を知ることは、可能である。むしろ自己の単独者たる性格は、他者との比較においてのみ十分に明らかとなる。明晰な自覚に到達することは、交わりを必要とするのである。

このように間接伝達は、相互交渉における吟味を伴い、代替されず、対象化されない自己存在である実存が、自らを自覚する契機として本質的な意味を持つものと言える。

#### 4 「了解」

この節では、『世界観の心理学』における「了解」について考察しよう。ヤスパースは「了解」に後年の「交わり」と共通する特徴を見ている。それは彼が了解を「愛ある闘争」と呼ぶことから伺える。「愛ある闘争」とは、『哲学』以降の「実存的交わり」の規定の一つである。

まずヤスパースによる「了解」の規定を簡単に見よう。先に述べたように、了解とは事柄の客観的な分析ではなく、全体的な構造連関における理解を旨ざすものである。

了解には、ある種のあいまいさがあり、客観的な考察による科学的心理学と、伝承を受け継ぎつつ自覚へと至る哲学の間にあるものと言える。後年記された『世界観の心理学』の第四版へのまえがきでは次のように述べられている。「実際の研究を唯一の道として承認する科学的心理学を、それ自身哲学であるか、あるいはむしろ哲学の代用品である偽りの心理学から境界づけることが問題である。了解心理学は、こうした科学的状況にあつては、あいまいな性格をもっている。了解心理学は、心理学と哲学との間の、大きな、内容的に豊かに充実された空間のようである。心理学と哲学の両方とも、この空間に入る。したがって科学的心理学への問いは今日、たしかに厳密に立てられねばならぬが、しかし普遍妥当な、一貫した、あらゆる研究者により承認された答えは、依然存在していないのである」(Jaspers1919:X I)。人間精神を人間が扱う以上、単に要素還元的な視点のみでは不十分である。逆に客観的なデータをないがしろにすれば独断に陥ってしまう。科学と哲学は単純に分離できないことが、了解という概念において先鋭に現われていると言えよう。

純粋に科学的な了解や純粋に哲学的な了解というものは現実には存在しないと思われるが、ヤスパースの考える「了解」の明確化のために、両者の違いについて考えてみたい。この問題は註3でも触れたが、ヤスパース自身は最終的な結論は出なかったようであるが、『世界観の心理学』から読み取れる範囲で検討しよう。「およそ心理学的了解は、個々の連関を把握し、把握された連関の総体性を、人格という一つの構成として、対象的に眼前にすえる。このような像がたとえどれほど豊富であろうと、了解がどれほど多面的であろうと、あくまで一つの深淵が残る。すなわち、了解の際にどうしても個々の連関が何らかの《一般的な》了解であるような、こうした了解と、こうしたいっさいを飛び越えている、個物の総体性的了解、この了解との間の深淵である。この総体性は、認識の対象のように、対象的ではない。それは対象的心理学的了解にとっては、単に《理念》にすぎず、それに向かって無限に前進しながら了解は運動するのである。主観的体験における絶対的了解は、通常の意味での心理学的了解と決して必然的に連関しているのではない。そのような絶対的了解は言葉として表現されうる必要もないし、そもそも意義を伝達することはできないのである」(Jaspers1919: S.124f)。この引用では、「心理学的了解」の対象は「人格」とであると述べられている。科学的な心理学は様々な個別の事象を構成し人格として対象化し、個別の人間の総体性を表そうとする。しかし対象的な像

はあくまで観察者によって構成されたもので、言葉により一般化されたデータの全体像である。しかし、現実に存在する個物の相対性は一般的なものでは捉えられない。このことは先に3で見たこと、すなわち個別的な実存は直接的には伝達されないということに対応している。心理学が目ざす「人格」は理念として無限の目標であると言えよう。これに対して引用で「絶対的な了解」と呼ばれているものが、哲学的な了解を指すと考えられる。一般的な規定では捉えられない個物の相対性、人格そのものを哲学的な了解は目ざすと言えよう。

この了解の哲学的側面は、「愛ある闘争」(liebender Kampf) という規定でより積極的な規定を与えられる。

「愛と同じく、この了解は何ら静止している態度ではなく、<運動>である。了解が絶対的なものを目指しているにしても、しかし了解は、人間たちの間の経験的關係の中では一人間たちはいまでもなくおよそいつでも成長しているのだが—ただ瞬間的にのみ静止しているものとして体験される。時間の中での人間たちの間では、了解は、<魂同士の愛しながらの闘い>としてはっきりと示される。あらゆる危険が冒され、形式・慣習・法律・原則といういかなる限界も永久に正当なものとは認められず、よしんばどのような人間生活が相互に至るところで隔たりを設け、そしてそれを必要としようとも、どんな隔たりもいつかは止揚される。闘いの媒体は、言葉で表現できる一般者・通用している客観性という媒体ではなくして—これらはしばしば象徴として、代理的表現として使われようと—、《精神》といわれる一般者なのである。それは、相互に仮借なく魂の根幹に手がかけて、いっさいが問いに付され、まさしくこうすることによって絶対的な肯定に達するようになる、一つの闘いの営みである」(Jaspers1919:S.125)。了解は主客を越えた絶対的なものを目指するのだが、了解が行われるのはあくまで時間の中であり、了解する人間は絶対的なものに向かって「いつでも成長している」のである。様々な制限を越えて一致しようという信頼に支えられているがゆえに、「愛ある」と言われ、その一致のためには容赦のない相互の吟味が必要なゆえに、「闘争」と言われるのであろう。了解は客観的なものを媒介にしているが、客観的なものを目的とするのではなく、最終的に静止することはない。それゆえ了解は常に闘いとして得られるものという性格をもつ。絶対的なものに鑑みて一切は検討に付され、真のありようが浮かび上がるのである。「絶対的な肯定」と言われているのは、愛ある闘争の中で、他ではありえない個物のありようが明らかとなり、それは受容される他はないことが覚知されることを指している

と考えられる。

愛ある闘争が権力を目指す闘争ではないことはもちろんである。「ひとは、この闘いがいづくに赴くかを知らないというのに、それにもかかわらずいつでも、愛の全き信頼によって支えられている、すなわちそのみが上述のもろもろの〔断絶・最大限の離間・幻惑と自己欺瞞・むなしい心酔・個人主義的な孤立化といった〕危険を、愛を喪失していることもないのに可能とする、こうした信頼により支えられているのである。こうした愛しながらの闘いにおいては、よしんばあらゆる力を繰りひろげるのであれ、おだやかに闘われるのであれ、権力本能によるいかなる動機も存在しない（権力本能は、瞬時にして愛を殺してしまう危険である）。相互理解の過程であるこうした闘いの目標は、いつでも暗いままにとどまる。こうした闘いは精神への信頼である、すなわち、実際は決して所有されていない絶対的なものを期待しての、相互にこうした継続的な関係にあるとの信頼であり、本質的なもの・本来的なものの領域にいるのだとの信頼である。了解においてあるこうした愛は、生を容易にせず困難にし、しかも同時に意義深くする。それは全人格に対し、形成的・鍛練的に働く」（Jaspers1919: S.125）。権力闘争は既存の自己を単純に肯定し、自己の維持・拡張をはかるが、愛ある闘争は自己の本来的ありようを探究する場面でなされる。了解はさしあたり他者の了解のことであるが、個物の総体性の了解には主客を越えた絶対的なものを追究することが必要であり、その追究には自己のありようの検討も含まれる。その絶対的なものへの信頼から、自他の共通性や理解の一致が期待される。追究の過程では、他者との断絶や自己あるいは他者への心酔などが生ずるが、それは絶対的なものをめざす了解が様々な局面を含む運動であることの現れである。そのような危険を含みつつ闘争は継続され、その中で自他は互いを損なうのではなく、互いを形成しあうのである。従って、愛ある闘争においては、自他は了解ということに関して全く対等である。

以上見たことから哲学的な了解の特徴を次のようにまとめることができるだろう。哲学的な了解は、単に自己が他者を観察し、様々なデータを構成して他者を把握しようとするものではない。他ではありえない他者と自己のあり方、他者と自己の絶対的な個別性は、一般的な概念を媒介しつつ了解しようと努める中で、浮かび上がってくる。自己のあり方を反省し、一般化されえない独自性を見だし、それと同じ要素を他者に見いだすことによって他者の了解はなされる。その要素は他者においては、自己における場合とは異なる現象の中にあるため、

他者の了解は単に自己との共通性を知るのではなく、他者の独自性の了解という意味を持つ。他者の独自性に鑑みて、自己の独自性が更に了解される。それゆえ、他者了解と自己了解は互いに促進しあいながら深化する。局所的な了解ではない十全な了解が実現するとすれば、それは自他を包含する絶対的なものにおける一致ということであろう。逆に言えば、自他を包含する絶対的なものは、局所的な了解の可能性を保証するものであり、了解の拠り所であり無限の目標であるとも言えよう。また自己についての考え方が変わるのであるから、了解は静的な観察ではなく、生のあり方を変えるものであり、自他を包含する絶対的なものへの自己形成という意味を持つ。

先にもふれた第四版へのまえがき（1954年）では、「私は『魂がいわばすべてである』というアリストテレスの命題を拠り所として、心理学の名のもとに何らうしろめたさもなく、知られうるいっさいを研究しはじめた。何となれば、このような広い意味では、心理学的側面をもたぬものは何も存在しないからである」（Jaspers1919: S. IX）と述べられている。人間の心理＝心の働きを了解しようとして探究を行なう中で、次第に実存の領域に関心が及んだと思われる。現実の心理学的了解は分析的・科学的な側面に止まらない要素があり、その要素が実存の理解として焦点となったということもできよう。

## 5 交わりに関する『世界観の心理学』と『哲学』の比較

この節では、以上見たことをまとめ、交わりに関して『哲学』と『世界観の心理学』を比較したい。

『世界観の心理学』と『哲学』の大きな違いは、前者では実存は「精神」（Geist）と同一視されていたが、後者では実存と精神が区別されるようになったことである。『世界観の心理学』では、実存は対象として把握されない単独者であり、対象化されるものを素材としつつ、それらを動かす力として理解され、「精神」と同一視されていた。『哲学』では、精神は諸々の理念のもとに生を秩序づけるが、実存はその理念を生きて働かせる「自由」として「超越的な」自己という規定を与えられるようになる。そして自由は実存が自ら作り出したのではなく、超越者から贈与されたものであるとヤスパースは考える。

「私が意志することにおいて、本来的に自分であった場合、同時に私の自由において、私が私に与えられていたのである」（Jaspers1932 II: S.199）、また「私が自由を問うことによって、自由がすでに存在するように、超越

者の可能性も、また自由それ自身のうちにのみありうる。私が自由であることによって、私は自由のうちにおいて、ただし自由を通じてのみ、超越者を経験する」(Jaspers 1932 II: S.198) と述べられている。実存は自由の行使において、その自由、また自由を行使する状況を作り出したものとして超越者を感じ得る。

そして『哲学』において、自由は他の実存との交わりにおいてのみ存するとされる。ヤスパーズは、実存的交わり以外の人間の対他関係として、第一に原初的で素朴な生物的共同体、第二に客観的な事物の共通理解、第三に何らかの理念の下の共同体という三つを考えている。これらは我々の世界に対する関わりの実質を構成しており、交わりの内在的・客観的契機であると言える。この三つの客観的な契機と別にあるわけではなく、これらを媒介としつつも、種々の客観性を生きて働かせ、また場合によってはある客観性を突破し、新たな客観性を設定することができるのは、種々の客観性から自立した、自由に行為できる存在としての実存である。そのような実存の自由は、他の実存との交わりにおいてのみ存在する。「他者がかれ自身であろうとしないならば、私は私自身となることができない。他者が自由でなければ、私は自由であることができない」(Jaspers 1932 II: S.57) と述べられている。他者とは異なる自己のあり方が明らかとなるためには、他者自身が私に属するのではなく、私から独立の存在であることが必要である。私ならざる他者と比較することではじめて、私の独自のあり様が判明する。従って、私の自由の意味が明らかとなるのは、他者自身もまた自由な存在であるときである。他者がもつばら私に従う存在なら、私は自らの自由を知ることはなく、自らの自由を自覚し行為することはない。

自由は交わりにおいてのみ存するのであるから、自由の追求は交わりの追求と同時的であり、自己の自由は交わりの実現の程度に応じて深化し、逆に交わりは自由の実現の程度に応じて深化する。また自由の根拠である超越者は交わりにおいてのみ顕現し、交わりを追求することが、間接的に超越者を追求することになる。超越者という理念により、自由の追求と交わりの追求は重なるのである。完全な自由があるとすれば、自由の根拠としての超越者と実存が一致し、実存が徹頭徹尾自らに依拠することであろう。また完全な交わりがあるとすれば、超越者において自他が一致することであろう。超越者は自由の根拠であり無限の目標であるとともに、交わりの根拠であり無限の目標である。

このような『哲学』における交わり思想と、『世界観の心理学』における「間接伝達」と「了解」を比較しよう。

まず間接伝達は一般化されない単独者としての実存の伝達であるが、この際、実存の単独者としての性格は、主として概念化不能という意味から理解されている。次に、『世界観の心理学』における了解は、さしあたりは他者の理解であるが、同時に自己の実存の理解であり、さらにその契機として主客を越えた絶対的なものとの関係を必要とするのである。この規定は『哲学』における交わり思想の萌芽であることは明らかである。しかし『世界観の心理学』では、絶対的なものについてさらに詳しい論究は見られない。また「間接伝達」「了解」の双方において、他者との相互交渉は他者との比較により自己の自覚に到達するために必要とされていたが、実存自身の生の場という意義は十分には現われていない。

『哲学』においては、精神と実存が区別され、実存が明確に自由として捉えられることによって、実存の超越性が強調される方向に進んだと考えられる。そして主客を越えた絶対的なものが「超越者」として概念化され、自由である実存の根拠として提示されるようになっていく。そのことにより、内在的な交わりとは異なる実存的交わりの性格が明確化し、交わりは自由行使の場であり、超越者顕現の場という意義を与えられるようになったと考えられる。自己を「伝達」したり、他者や自己を「了解」することは重要な契機であるが、伝達や了解を目指しつつ、相互交渉すること自体が焦点となったと言えよう。哲学的な背景を持つ間接伝達と心理学的な由来を持つ了解は、契機として実存的交わりに包含されたと言うこともできよう。さらに、超越者そのものが顕現するのではなく、交わりにおいて間接的に顕現するという、超越的なものに対するヤスパーズの考えも完成したと考えられる。

以上のことから、実存が明確に自由として捉えられたことにより、『世界観の心理学』における「間接伝達」と「了解」は、『哲学』における「交わり」として発展したと考えることができる。

## 6 おわりに

最後に本稿の目的を越えるが、ヤスパーズ思想の全時期にわたって交わり思想の位置づけがどう変わったか、概観しておこう。

まず本稿で考察した『世界観の心理学』(1919)の時期は、了解心理学を確立した時期であり、後年の交わり思想の萌芽が、「間接伝達」と愛ある闘争としての「了解」という形で見られる。しかし、哲学的関心に由来する間

接伝達と、心理学的概念に由来する了解は、十分には統一されていない。この点にも、心理学から哲学へと関心・考察が移った時期であることが示されていると言えよう。次に『哲学』(1932)の時期は、独自の実存哲学を確立した時期であり、交わりの規定が完成する。交わりは独立した章として、実存の規定の一つとして叙述されている。次に『理性と実存』(*Vernunft und Existenz*) (1935)、『真理について』(*Von der Wahrheit*) (1947)の時期は、理性を主題とし、哲学論理学の構築を企図するようになった時期である。理性が、「交わりへの意志」「統一への意志」と規定され、哲学を行なう原動力として位置づけられる。それに伴い、交わりは全体の構成の中に根本的な概念として浸透することになる。それと同時期の『哲学的信仰』(*Der philosophische Glaube*) (1948)では、理性を手段とするが超越的なものに関わる「信仰」として哲学が規定され、自らの立場を「哲学的信仰」と掲げるようになる。最後に、『啓示に面しての哲学的信仰』(*Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung*) (1962)の時期は、哲学的信仰と宗教的信仰の関わりが深く究明される時期である。理性に依拠する哲学的信仰と啓示に依拠する宗教的信仰との、信仰間の交わりが主題となっている。

以上はごく概略的な把握であり、それぞれの著作を参照しつつ詳細に検討する必要があるが、それは別の機会に譲りたい。

## 文献

(引用文中の下線は原文のイタリック、<>は隔字体、<>>は引用符を示す。また[ ]内は筆者の補足である。和訳は基本的に掲げてある邦訳書に従ったが、筆者の考えで訳出した箇所もある。)

Jaspers1919:Jaspers,K.,Psychologie der Weltanschauungen,6.Aufl.,Piper, München,1985。(重田英世訳、『世界観の心理学』創文社、1997年)

Jaspers1932 II : Jaspers,K.,Philosophie bd. II:Existenzerhellung,Springer,Berlin-Heidelberg-New York。(草薙正夫・信太正三訳、『哲学』第二卷『実存開明』、創文社、1964年)

Jaspers1932 III : Jaspers,K.,Philosophie bd. III:Metaphisik,Springer,Berlin-Heidelberg-New York。(鈴木三郎訳、『哲学』第三卷『形而上学』、創文社、1969年)

Jaspers1935 : Jaspers,K.,Vernunft und Existenz , Neuausgabe,Piper,München。(草薙正夫訳、『理性と実存』、理想社、1972年)

Jaspers1947 : Jaspers,K.,Von der Wahrheit ,Neuausgabe,Piper, München。(林田新二他訳、『真理について』、理想社、1976-97年)

Jaspers1948 : Jaspers,K.,Der philosophische Glaube, Neuausgabe,4.Aufl.,Piper,München,1988。(林田新二監訳、『哲学的信仰』、理想社、1998年)

Jaspers1957 : Jaspers,K.,Philosophische Autobiographie,in Karl Jaspers, Heraus. von Paul Arthur Schilpp,W.Hohlhammer Verlag , Stuttgart,1957。(重田英世訳、『哲学的自伝』、理想社、1965年)

Jaspers1962 : Jaspers,K., Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,3.Aufl., Piper, München,1984。(重田英世訳、『啓示に面しての哲学的信仰』、創文社、1986年)

## 註

- \* 1 Jaspers1957 S.3f.
- \* 2 Jaspers1919 S. I X (1954年に書かれた第四版へのまえがき)。
- \* 3 Jaspers1919 S.X I (1954年に書かれた第四版へのまえがき)。ただし、同じ箇所で「しかし真の哲学が何であるのか、何でありうるのかは、私にとって、あとあと今日に至るまで問題となり、とりわけ課題となった」と述べられている。「心理学」「科学」「哲学」「了解」ということをめぐって、科学的ではない心理学とは何か、心理学と哲学の違いは何か、さらに、科学と哲学の関係はいかなるものか、そもそも哲学とは何か、という問題は、後年に至るまでヤスパーズは結論がだせなかったようである。
- \* 4 Jaspers1957 S.24f.
- \* 5 Jaspers1957 S.27f.